実践と理論のあいだを行き来する土木計画学
～個別の実践研究を体系的な知へ積み上げるために～

名古屋大学　　正会員　○早内　玄

１．土木計画学における実践と理論

理論を「科学研究において，個々の現象や事実を統一的に説明し，予測する力をもつ体系的知識」（スーパー大辞林）とするならば，理論とはいわゆる数理に閉じず，各事象を貫く体系的知識の総体と理解できる．

土木計画学における実践は多岐にわたるが，本稿では何らかの現場を対象に行われる個別的取り組みから得られる情報・知見を扱う研究と粗く定義する．各実践の背景が異なり，後述するように，ときとして体系化を強く意識せず取り纏められる場合もあることから，実践研究の行き着く先が，ケース・スタディの増加に留まり，知見として積み上がらない難しさに直面するように感ずる．これが，筆者の主たる課題認識である．

個別の取り組みを基盤とする実践研究は，職業研究者にとっても難しさを孕む場合がある．実際，個別事例の分析単体から特筆すべき新規性を見出すことは（当然，全くないわけではないが），容易ではないだろう．この際，小手先の新規性を求めてしまうと，後述するような，事例の蓄積を通じた体系的な知見の獲得を図る際，これを阻害する可能性がある．むしろ，大きな学術的知見を得る過程としての，個別実践の分析という位置付けを明確化し，事例を正確かつ丁寧に記録・継承する意味の知見と，これら蓄積の先にある，場合によっては挑戦的な解釈を含む学術的議論としての知見の双方に対するリスペクトが一層求められるのだろう．近年，土木学会論文集の土木計画学領域では「政策と実践」「方法と技術」への再編が行われた．この再編がもたらす今後の肯定的影響が期待される．

むしろ，個別実践例を積み重ねた先にある理論において，新規性を求められるのであろう．ここでいう理論は，積み上げられた実践例に対する横断的な視点を要するだろうが，そこには定性的な解釈を含むフレームワークを語るものもあれば，定量的な検証に主眼を置くメタ分析のようなものもあるだろう．議論される各「理論」の社会的背景は日々変化し，基盤となる実践例も次第に増える前提のなか，先行研究（理論）に対する建設的批判を通じた更新は，常にあって然るべきだろう．むしろ「学問上の『達成』はつねに新しい『問題提出』を意味」し，「他の仕事によって「打ち破られ」，時代遅れとなることをみずから欲する」[1)]のであるならば，たとえ軽微なものであっても，その更新を怠ってはならないと言える．

２．個別の実践例から理論を得るために

土木計画学における個別の実践例から「理論」を得るためには，一定の基盤も必要と考えられる．いうまでもなくドキュメントとしての媒体には学術論文があり，今後も中心的な存在であり続けることが期待される．

一定程度，根拠となるデータの共有が可能ならばメタ分析を加速させるであろう．国際誌ではそれを求める潮流もあると承知しているが，土木計画学における実践例によるデータは，実験室環境で得られたものではなく，扱いに留意を要するものも多いことから，容易ではないと考えられる．いわゆる「生データ」でなくとも，論文本体に記載可

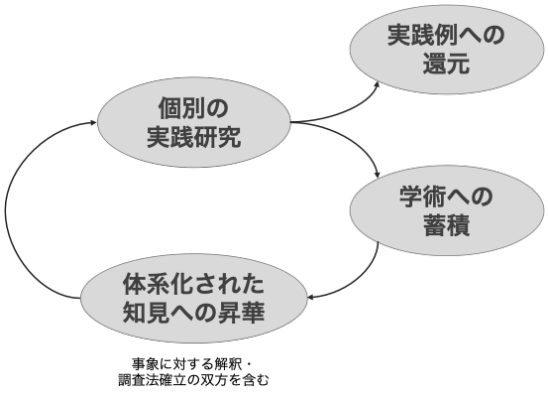


図１　実践研究と体系的な知のループ

キーワード　実践研究，メタ分析，土木計画学
連絡先　　〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町
mail@genhayauchi.jp

能な集計後のデータをもとにメタ分析を行うことは当然可能である．一方，指標等に統一性がなく，軽微な差異が直接比較を妨げる例は多々あるように見受けられる．いうまでもなく，実験計画法や統計学において，効率的な調査設計手法や結果の検定手法には理論が存在する．ただし例えば実験計画法は「取り上げる対象の結果と・それに影響を与えると思われる要因の関係を調べるために，時間面，経済面等の制約を考慮しながら実験によりデータを得て，それを解析するための方法」[2)]であり，そもそもどのような実践に対し，誰から・何から，どのようなデータ項目を得て解釈するか，どのように尋ねるかについては，一部の実践例はあるものの，体系的な理論化の余地がまだ多くあると考えられる．

医学や心理学の領域では統一的な質問紙を含めて，一定の共通化が行われているとの認識だが，現場での調査法については，土木計画学において一層の関心が期待されると考えられる．先述のように，個別の実践例は，もとより背景も異なり比較が容易ではないなか，せめて調査における一定の共通が達成されたならば，実践を取り巻く事象の「因数分解」を可能とし，実践研究を理論につなげる際に大きな助けになることが想定される．

３．実践の現場への還元と評価

実践研究においては，研究者の立場のみが尊重されてはならないことは言うまでもない．実践の場を借りて研究を行う以上「地元から何かを奪って来るのだから，必ずなんらかのお返しをする気持はほしいものだ」[3)]という意識を忘れてはならないだろう．では何を返せば良いかを考えると，現場が求めるのは必ずしも新しい知見とは限らない点を思い返す．むしろ，信頼できる「確かな」知見と，肌感覚の言語化に大きくは収斂しそうである．前節に整理した，実践例の蓄積にもとづくフレーム定義，メタ的検証の双方がこれに資するだろう．

先行する実践例にもとづく「理論」が，次なる実践の現場に資するものであったかは，研究者の成果に対する評価においても今後求められるであろう．現在，研究成果の評価は主として論文件数と，当該論文の学術的インパクトによって行われる傾向にある．この評価には，現場に対して当該論文がどの程度貢献したかが，必ずしも反映されるとは限らない．このような議論は，都市計画学会誌[4)]などでも見られるが，その手法の検討を含め，今後一層の議論が求められる事項と考えられる．なお，各実践例において生じた事象の解釈は，必ずしもその地域が当初想定した仮説とは異なる可能性もある．このことを恐れてはならず，現場の実践例に向き合う研究者こそ「勇気ある知識人」（名古屋大学学術憲章）たる必要性を，自戒を込めて付記しておきたい．

４．おわりに

本稿では「実践と理論のあいだを行き来する土木計画学」という題目のもと，SIP 第 3 期「スマートモビリティプラットフォームの構築」課題での取り組みなどを通じた，筆者の所感等を記した．浅学にしてエビデンス・認識不足も想定されるが，厳しいご指摘をお願いしたい．また，土木計画学への所感としつつ，筆者が主に関わる，都市交通・公共交通・地域交通領域を想定した内容である点をご容赦いただきたい．

謝辞　本稿には、内閣府総合科学技術・イノベーション会議の下で推進する「戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)第３期／スマートモビリティプラットフォームの構築」（研究推進法人：国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構）(NEDO 管理番号：JPNP23023)の成果が含まれています。

参考文献

1. マックス・ウェーバー（1936）「職業としての学問（尾高邦雄訳）」岩波文庫
2. 山田　秀（2004）「実験計画法–方法編-」日科技連
3. 宮本常一・安渓遊地（2008）「調査されるという迷惑」みずのわ出版
4. 日本都市計画学会（2026）「都市計画」Vol.75 No.1，pp.46-51